

# 教材開発と表現についての実践的考察

## —創作と演奏の立場から—

Practical consideration about teaching material development and expression : From the viewpoint of Composer and performer

谷中優(スタジオ M 音楽研究所) 鈴木由美子(千葉敬愛短期大学)

TANINAKA Suguru(S. M. M. L) SUZUKI Yumiko(Chiba Keiai Junior Coll.)

(キーワード)

創作、演奏、音楽教育、教材開発、コラボレーション

### 1. 本論のテーマについて

#### (1) テーマが包含するもの

歌曲「母 五つの詩(うた)」<sup>1</sup>は論の元になった楽曲である。その成立に至るプロセスには前出の「キーワード」が包含される。そうしてテーマには第一に「創作」の行為が存在している。つまり創作表現=作曲である。第二に作品を音化するための「演奏」の行為がある。第三に主として奏法に関する作家と演奏者のディスカッションがある。このディスカッションは最終的な「演奏」の行為を含むコラボレーション活動である。第四として楽曲は音楽教育における「教材開発」としての意味を持ち、「日本の音楽」の観点から「教材化」の可能性を内包している。ただし筆者は本作品の当初から「教材開発」を志向していたものではない。

### 2. 研究

#### (1) 研究内容

本来教材開発には「教材の作成作業」が包含されるが、本論では楽曲成立のプロセスについて言及しながら「教材化」と「演奏」の二点を中心に論じる。

#### (2) 研究分担

a. 谷中は楽曲と教材化について

b. 鈴木は箏版楽譜の奏法や記譜法、楽曲の教材化に伴う指導方法等について。また本研究はその特性から演奏(Live Performance)を伴う。

### 3. 研究の展開と考察

#### (1) 研究-1 谷中

##### a. 楽曲について

楽曲は自作の短歌五首に曲を付けたもので、それゆえ五曲の短編から成る歌曲である。演奏の観点からピアノ伴奏版と箏伴奏版を作成した。資料1は箏版の第一曲目の冒頭である。記譜法、奏法等については共同研究者から多くの教示を得たことを記しておく。



(資料1)

次に詩を提示する。

次

肅々と秋雨を往く母逝きて寂しかりけり下総の国  
秋空の伊予に向ひて我が母は花道連れに旅に出るらむ  
草枕旅立つ母の身の軽さ細き腕ぞ哀しかりけり  
柞葉の母は空しくなりにけり尾張の国の藍のしじまに  
白妙の白き衣の我が母は心安げし旅人となりぬ

##### b. 教材化の可能性について

<sup>1</sup> スタジオ M 出版 2018.12

箏版は作曲の段階において音楽教育、特に日本伝統音楽の学習に使用可能ではないかと考え、教材化を志向したものである。但し本楽曲を教材化するにあたり、詩が果たして教材に値するものであるかどうか等の懸念がある。人の死についての内容故、明るいものではないこともその理由の一つである。なお、いうまでもなく本楽曲の教材化は一つの仮説である。

## (2) 研究-2 鈴木

### a.演奏の前に

箏の調絃は、その曲によって指定されていることが多い。八橋検校が組歌や段物に多く用いた調絃で、のちの箏曲で最も多く用いられている平調子、その平調子から四、九を全音、六、斗を半音上げた楽調子などに代表される調絃である。が、曲によって変化させることができる。今回、指定された調絃がなかったため、十三本の絃の並び(調絃)を考えるとところから始めた。全5曲の演奏は、できるだけ箏1面で行いたいと考え、下記のようにした。曲中足りない音は押手で、それでも補えない場合は、その都度調絃替えを行い対応する事とした。

絃名：一二三四五六七八九十斗為中  
 肅々と・DEFAHEFAHDEFA  
 秋空の・DEFAHDEFAHDEF  
 草枕・・・DEFAHDEAHDEFA  
 柞葉の・・・同上  
 白妙の・DEFADEGABDEFA

(ドイツ音名表記)

### b.演奏者としての工夫

速度の表示は楽譜を頂いた初めからされていたのだが、詩の内容からかなりゆったりと弾いていた。しかし作曲者の意図を受け、かなりの修正をした。するとどっぷりと浸った悲しみではなく、さらりと流れるさり気無さの中に深い悲しみが感じられるような演奏に変化した。

歌については箏の音と歌のメロディーの中に意図的な不協和音が使用されている。古典などでは、その

調絃(古今調子等)の中で二度音程や半音で箏と歌が奏でられることも多いが、今回はぶつかり合う音をとらえることが思いのほか工夫を要した。

箏では弾き歌いが当たり前であるが、その発声において、邦楽の腹式呼吸を伴う地声発声だけでなく洋楽の発声も混ぜて使用した。

また、奏法については、箏は概ね右手の爪をはめた親指、人差し指、中指を使用するが、表現と音色の多様性を求めて、左手を駆使することとなった。「柞葉の」においては、左手ピチカートと同時に指先で胴を打ち、打楽器の要素も取り入れた。

### c.教材として使用する場合

洋楽と邦楽、双方の姿を併せ持つこの曲を教材として考えた場合、まず演奏者に双方の素養があることが必要であろう。演奏上及び指導のポイントは、左右の手の兼ね合い、曲途中の調絃替え、詩は詞(ことば)と音程、リズムのバランスと考える。

また「歌う」と「語る」の発声、発音の違いを明確にすることも重要なポイントとなる。

## 4. 最後に

教材としての楽曲については教育現場において次の三点が考えられる。

- (1) 楽曲の理解
- (2) 演奏(に取り組む)
- (3) 日本伝統音楽と現代的な手法への理解

上記三点のいずれにおいても、指導者の指導方法への創意工夫が重要であることは論を待たない。

特に初演者として演奏上の留意点を挙げれば、分析の段階で、歌と手(演奏)が対峙する個所と寄り添う部分、箏の音と歌の旋律が不協和に響きあう個所を理解することである。また、「悲哀」の表現方法について、作曲者の手法を熟思することも必要である。

本研究は一つの楽曲を研究対象に定め、その創作と演奏表現をもってテーマを具現化し、考察を深化させることにある。